Computex2017 & InnoVEX2017 レポート＜４＞
２年目を迎えたベンチャーイベント InnoVEX と SmarTEX エリアの注目製品

Taipei Computer Association 東京事務所　駐日代表　吉村 章

■ InnoVEX 2017 とは Computex に併設されたベンチャーイベント

Computex レポートの最終回は InnoVEX と SmarTEX エリア(Smart Technology Applications & Products) をレポートする。

InnoVEX とは Computex 内に設けられたスタートアップ企業を対象としたイベント。出展企業は 23 の国と地域からの 272 社。海外からの出展も多く、国内外の多くのメディアからも注目を集めた。このイベントは昨年から Computex に併設され、今年で２回目の開催となる。会期は５月 30 日 (火曜日) から６月１日（木曜日）までの３日間。Computex 会期と重なる。(Computex は６月３日までの５日間) 信義地区の世界貿易センター第３ホールが InnoVEX の専用会場として使われた。

イベント名となっている InnoVEX とは、Innovation、Venture、Exhibitions を組み合わせた造語。ＩＴ分野のハードウエア及びソフトウエアで革新的な技術の開発に取り組んでいるスタートアップやベンチャー企業の祭典である。自ら開発した技術やビジネスモデルを発表し、投資家や大手ベンダーに売り込むことが目的。国内だけでなく海外の有力な VC（ベンチャーキャピタル）も注目するイベントである。

会場は出展ブースのエリアとステージのエリアに分かれる。第３ホールの正面から入って左奥には会場面積のおよそ４分の１を使ってセンターステージが設けられ、キーノートスピーチやパネルディスカッション、ピッチコンテストなどが行われた。他にもプレゼンテーションステージ（ミニステージ）やパビリオンでのプレゼンテーションなど出展企業が技術力やビジネスモデルを発表する機会が多く設けられ、それぞれ熱気に溢れたプレゼンテーションが行われた。来場者総数は３日間でおよそ１万５千人。

プレゼンのメインは３日間を通してセンターステージで行われたピッチコンテスト。最終日の午後に行われたファイナルでは立ち見がでるほどの盛況ぶりだった。優勝賞金 30,000 米ドルを賭けてプレゼンテーションが繰り広げられ、各社とも技術力やビジネスモデルを審査員にアピールした。審査員側からも鋭い質問が浴びせられ、真剣勝負のやり取りはなかなか見応えがあった。

InnoVEX はスタートアップやベンチャー企業を集めた展示会。23 の国と地域から 272 社が出展。国内外の投資家やスタートアップ支援機関も多数参加。Computex に併設されて今年で２回目となる。

会期は5月30日(火曜日)から3日間。世界貿易センター第3ホールにはセンターステージが設けられ、フォーラム、パネルディスカッション、ピッチイベントなどが開催された。

ピッチコンテストのファイナルではおよそ300席の会場席に立ち見がでるほどの盛況ぶり。登壇する企業のプレゼン持ち時間は6分間。その後、同じく6分間のQAを行われた。審査員はこのQAの時間に技術力やビジネスの将来性を見極める。

■台湾大手ベンダーのビジネスモデルに大きな変化が・・・

なぜ、いま台湾のスタートアップが注目を集めているか、それは台湾がパソコンやタブレット、スマホなどのIT端末を量産してきた大手ベンダーの事情とも関係がある。台湾の大手ベンダーはこれまでにない発想で技術革新や製品開発力に取り組むベンチャーとの連携を模索している。その背景にはIoT時代の製品開発の多様化が挙げられる。キーワードはIoTである。これまで台湾の大手ベンダーは高品質のパソコン、タブレット、スマホなどのIT端末を大量に安く生産することをビジネスモデルとしてきた。しかし、こうしたビジネスモデルが崩れようとしている。IoTの出現によって多様なニーズに、スピーディに、フレキシブルに対応することが求められている。従来のビジネスモデルでは通用しないのだ。

Smart Home(住宅・家電)、Smart Office(オフィス・事務機器)、Smart Vehicle(車)、Smart Education(教育)、Smart Agri(農業)など、それぞれIoT分野における成長の可能性を支えるのはイノベーション(Innovation)であり、さらにそのイノベーションを起こすためにはスタートアップの新しい力が必要となる。IoT、イノベーション、ベンチャーといったキーワードが台湾IT産業の今後を占う鍵となっている。

別の見方をすれば、スタートアップやベンチャー企業にとって、台湾の大手ベンダーとの連携は大きなビジネスチャンスとなる。大手ベンダーと連携することでスタートアップに必要なさまざまなサポートを受けることができる。また、自社の技術やビジネスモデルが大手ベンダーの目に留まれば、同時に投資家からの資金調達にも道が開ける。世界の有力VC(ベンチャーキャピタル)とのコンタクトも可能だ。

VC側も単なるスタートアップの技術に注目するだけでなく、アクセラレータとして役目を果たす大手ベンダーの存在があれば、安心して投資先候補とすることができる。ベンチャーを発掘し、育て、ビジネスモデルを構築することができるかどうか、台湾の大手ベンダーだけでなく、世界の有力VCも台湾のイノベーションの力に期待している。

もちろん、訴えかける技術や製品、そしてサービスやビジネスモデルが投資家にとって魅力なものでなければならない。他にはない技術力や製品

力があり、ビジネスモデルの独創性が前提である。このように台湾ならではの環境が産業連携を可能にしている。その中核を担うイベントがInnoVEX なのである。

■ピッチの優勝賞金は3万米ドル、InnoVEX 2017 では Amaryllo(アマリオ) が獲得

ピッチのエントリー企業はおよそ100社。そのうち海外からのエントリーはほぼ半数。エントリー100社のうちで28社が書類審査を通過し、ピッチコンテストの出場権を獲得した。このうち25社が初日と2日目の午後に行われたセミファイナルに参加。その結果、ファイナリスト8社が決定し、最終日の午後に決戦大会が行われた。最終的に優勝を勝ち取ったのはロボットカメラでファイナルに臨んだ Amaryllo(アマリオ) で優勝賞金3万米ドルを獲得した。また、Addweup は賞金1万米ドルの Foxconn Technology Group 特別賞を受賞した。

ロボットカメラでファイナルに臨んだ Amaryllo(アマリオ) が優勝賞金3万米ドルを獲得。

Foxconn Technology Group 特別賞は Addweup が受賞。賞金1万米ドルが贈られた。

ピッチでプレゼンする Amaryllo(アマリオ) の担当者。ピッチ参加企業は書類審査で28社に絞り込みが行われ、その中の25社がセミファイナルに参加。最終日の決戦大会にはファイナリスト8社が競い合った。

ATOM AR2 はソケットに直接差し込むタイプ。他にもさまざまな製品をラインナップ

Amaryllo(アマリオ) は Computex ブースにも出展。スタイリッシュな形状はバイヤーからも注目を集めていた。

■台湾 IT 産業の 3 つの「強み」と Computex & InnoVEX

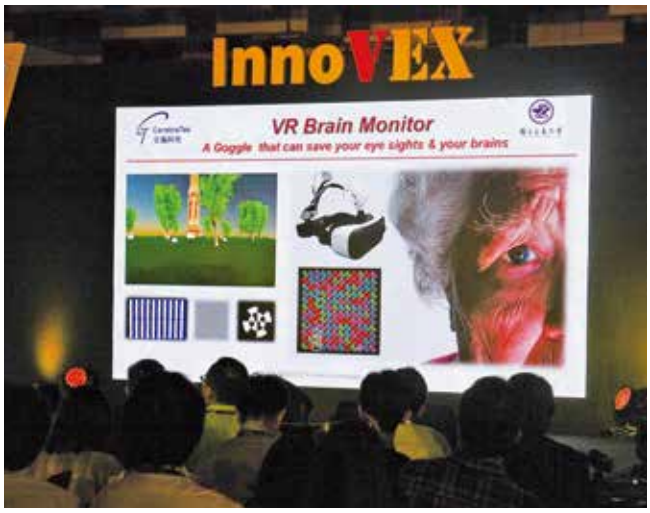
ここで台湾企業の「強み」をもう一度整理しておきたい。ポイントは 3 つに点にまとめられる。第一に、これまで OEM/ODM（Original Equipment Manufacturing/Original Design Manufacturing manufacturer）で培ってきた長年のモノづくりのノウハウであること。市場のニーズに合わせて短期間で製品を設計し、量産体制をいち早く整え、グローバルな販売網をフルに活用して世界中に製品を供給してきた。1990 年代には「世界のパソコン工場」と言われるようになり、グローバル市場をけん引してきた。

第二に、台湾には原材料の調達からさまざまな部品の供給まで量産体制を支えるサプライチェーンがあること。台湾ではハードウエアであればほぼすべての部品が台湾内で調達できる。さらに、コストパフォーマンスを考えた場合は中国企業からの部材の調達や台湾企業が持つネットワークを生かして中国で生産体制を作ることも可能。また、ハイエンド部品調達は日本とのネットワークもある。こうしたサプライチェーンと生産基盤の厚みが台湾企業の大きな「強み」となっている。

第三に、グローバルな販売ネットワークだ。欧米に限らず、中南米、東欧、中国、東南アジアなど、台湾ベンダーにとってグローバル市場が主戦場。全世界に販売ネットワークを構築している。これまで世界中に製品を供給してきた実績と人的なネットワーク。これが台湾企業の「強み」である。3 つの「強み」の中核にあって具体的なプラットフォームの役割りを果たしているのが Computex である。今年の Computex では外国人バイヤー登録者数は 4 万人。世界中から製品の買い付けにバイヤーが集まった。このように製品調達と販売ネットワークの核になっているのが Computex なのである。

同時に Computex はそのサプライチェーンの中核でもある。主要パーツやコンポーネンツの調達の場であり、新しい製品の発表の場であり、販売の場でもある。Computex は IT ベンダーにとってモノ作りのプラットフォームとなっている。製品を供給する側から見るとグローバル市場に売り込む最前線であり、買い付け側から見ると製品トレンドを知り、市場で売れるものを探すための最前線でもある。

そして、2017 年からは InnoVEX が併設された。つまり、台湾で開催されるピッチは、ベンチャーのアイデアをまず形にし、次に量産モデルへ、そして世界中に売りさばく・・・。この 3 つを実現するためには絶好のプラットフォームなのである。パソコンやその周辺機器をはじめ、さまざまな製品で築き上げてきた量産技術、サプライチェーン、販売ネットワークは、今後の IoT 分野でのビジネスにも十分に生かすことができる。この点は台湾ならではの「強み」と言えるだろう。



ベンチャー企業のアイデアを具体的な製品にするための絶好の環境。InnoVEX はアイデアを形にし、量産へ、グローバル市場へ…。世界への扉となるベンチャーイベント。

InnoVEX の仕掛け人のひとりである Anis Uzzamn 氏。ピッチイベントでも審査員長を務めた。InnoVEX 2018 は 2018 年 6 月 6 日 (水曜日) から 3 日間の開催予定。出展、ピッチともに日本からのエントリーも可能。詳しくは TCA 東京事務所まで。

■ 世界貿易センター第 1 ホール、SmarTEX エリア (Smart Technology Applications & Products) に注目

Computex2017 レポートの最後に SmarTEX エリア(Smart Technology Applications & Products) を紹介する。SmarTEX エリアとは世界貿易センター第 1 ホールに設けられた主に IoT 関連製品を集めたエリアである。

Computex 視察では多くの人がまずは南港ホールに足を運ぶのではないだろうか。大手のセットメーカーが数多く出展し、ショウアップされたステージで製品紹介が行われるエリアである。確かに華やかさがあるのは南港ホールではあるが、Computex の中で最も Computex らしい出展製品が集められているのは SmarTEX エリアと言っても過言ではない。IoT 技術を活用した新製品、ユニークなアイデア製品、開発途上のプロトタイプから量産を控えた完成度の高い新製品など、SmarTEX エリアには注目製品が並ぶ。

今年の SmarTEX エリアでまず眼を引いた出展は工業技術研究院（Industrial Technology Research Institute/ 通称 ITRI）のブース。AI を組み込んだロボットがチェスをする展示や車両に搭載したカメラが道路を走行している車両の運行を解析する車載型 N システム、家庭用の農薬感知システムなど出展されていた。

工業技術研究院 (ITRI) では研修者をスピンオフさせること、つまり研究成果が具体的な製品やサービスとして民間利用されていくことをひとつの目標にしている。工業技術研究院 (ITRI) は日本の産総研（国立研究開発法人産業技術総合研究所 /AIST）にあたる機関でおよそ 6 千人の研究者とスタッフを有する。これまでも積極的に民間への技術移転や研究成果の製品化に取り組んできた。毎年、Computex では研究所の研究成果を具体的なプロダクトの形で展示。民間への技術移転を積極的に行っている。

世界貿易センター第１ホール正面の入口を入ってすぐのコーナーに工業技術研究院 (ITRI) ブース。まずチェスをするロボットが来場者を出迎えてくれた。写真は取材中の海外メディア。

スムースな動きでチェスの腕前を披露。工業技術研究院 (ITRI) は台湾を代表する研究機関。民間への技術移転を積極的に行っている。

工業技術研究院 (ITRI) はその歴史を遡ると半導体産業や液晶産業などの立ち上げに深く関わり、台湾の IT 産業をけん引してきた台湾を代表する政府系の研究開発機関である。1973 年の設立以来、2 万件の特許取得件数、260 社にも及ぶベンチャー企業を育成してきた。留学で海外に渡った優秀な台湾人を呼び返す受け皿にもなり、設立当初からアメリカの大学や研究機関にから多くの研究者や留学生が工業技術研究院 (ITRI) を足掛かりにスピンオフしている。台湾 IT 産業を支える礎になった。

「研究者のスピンオフ件数が研究院の評価に繋がる」とまで言う関係者もいる。言い換えれば、研究者にとってスピンオフができるかどうかで研究成果の成否が問われるのである。民間への技術移転や応用可能な特許の取得が研究成果として評価される。結果が求められる厳しい世界だ。

つまり、Computex とは研究者が自身の研究成果を世に問う場でもある。Computex でアライアンスパートナーが見つかるかどうかで研究成果の是非が問われる。Computex は単なる成果発表の場ではなく、世界中から集まるバイヤーに研究成果を売り込む真剣勝負の商談の場でもあるのだ。

N システムのモバイル版。車に搭載したカメラが車両のナンバーを認識する。郵便配達や清掃車、水道、ガス、消防など自治体の公用車、バスやタクシーなどに搭載してネットワークを構築し、固定のカメラの情報を補完する。

家庭用の農薬感知システム。研究成果の製品化を目指すことが工業技術研究院 (ITRI) のミッション。研究者のスピンオフも研究実績のひとつとなる。

野菜を洗った洗浄水で残留農薬を検知する。食の安心・安全を目的に開発された製品。すぐにでも実用化されそうな完成度だ。

ドローンの商用利用。上空からのイベント撮影、橋梁検査、太陽候発電の装置観測、夜間のセキュリティ利用などの実証実験の事例が紹介されていた。

■ Computex の出展製品は「最先端」ではなく「実用先端」を重視

機関誌「交流」7 月号 vol.916 の Computex2017 レポートでは「Computex は最先端技術の展示会ではない」という点を書いた。キーワードは「実用先端」である。誤解を恐れずに言うと、Computex とは先端技術の完成度の高さを競う展示会ではなく、市場が求めている製品を実用的な先端技術を駆使し、安定した品質の量産体制を整え、世界に供給するための製品を展示する場である。

残念ながら Computex には自動運転技術や 8K・16K 技術、ビックデータや第五世代の通信技術はない。むしろ家庭やオフィスでいま必要とされている製品やソリューションが主役だ。SmarTEX では半年から一年後ぐらいに製品化を控えている技術やソリューションが数多く登場する。高付加価値を追求するのではなく、必要十分にしてコストパフォーマンスのよい製品を、安く大量に供給していくことが台湾ベンダーの強みであり、そこが Computex に世界中からバイヤーが集まる理由である。

そういう意味で、繰り返しになるが Computex の展示の中で最も Computex らしいと言えるのが SmarTEX エリアである。言い方は少し乱暴かもしれないが、日本の企業では恐らく稟議が通らないような製品も数多くブースに並ぶ。まずはアイデアを形にして、バイヤーの反応を見る。完成度を上げていく取り組みはバイヤーの反応次第。市場のニーズに合わせて少しずつ完成度を上げていくための作り込みを行う。開発者のそんな熱い思いを感じることができるのが SmarTEX エリアの製品なのである。「Computex の中で最も Computex らしいところ」と言える由縁がここにある。

ここからは今年の Computex に出展されていた製品の中から筆者が注目した製品をいくつか紹介したい。製品に関する問い合わせは TCA 東京事務所までご連絡いただきたい。日本のマスコミでは報道されないような製品を集めてみた。

Computex で最も Computex らしい出展製品が集められているのが SmarTEX エリアである。

Computex は最先端技術を競い合う展示会ではなく実用先端技術がメイン。必要十分にしてコストパフォーマンスのよい製品を、安く大量に供給していくことが台湾ベンダーの「強み」である。

スマホに直接装着できる 360 度カメラ。今年の Computex では 360 度カメラの出展が多かったがスマホに直接装着できるタイプはこれだけ。画像処理アプリの完成度も高い。

指に読み取り端末を装着して使うハンディスキャナー。左手の指と右手の操作でバーコードのスキャニングができる。腕に装着するので両手で作業ができる。ありそうでなかった製品。

防水・防塵仕様の工場用の PHS 端末。落としても壊れない。耐久性が高く、バーコードの読み取りも可能。さまざまな現場で活躍しそうだ。これもありそうでなかった製品。

表と裏とどちらからでも差し込める USB ケーブル。USB ケーブルをうまく差し込めず裏返してみたり、元に戻してみたり、そんな体験をしたことがある方も多いはず。そうしたちょっとイライラが解消できる優れモノ。

被写体を自動的に追尾するカメラスタンド（三脚）、スマホの装着部分にモーターが取り付けられていて顔認証アプリで自動的に被写体を探して軸の部分が回転しシャッターを切る。暗い場所ではライトが点いて被写体を照らす。

ふくらはぎに装着するサポータータイプのウェアラブル端末。バイタルセンサーが筋肉の収縮や血流をモニターする。運動量や筋肉にかかる負荷を測定して運動プランをアドバイスする。電極が装着されていて運動後にはマッサージ機能もあるというところがたいへんユニーク。

スマートコーヒーメーカー。スマホで操作し、気分に合わせて好みの味のコーヒーを入れることができる。プログラムをセットすれば一流のバリスタの味を家庭で再現することも可能。

ペット用のおもちゃ。モーターで動く仕掛け。カメラが内蔵されていて、離れたところからでも犬が飛び掛かってくる様子がモニターできる。愛犬の見守りだけでなく、いっしょに遊べるところがユニーク。

スタイリッシュな非接触充電器。立てかけておくだけで複数のタブレットの充電が可能。技術力とデザインセンスで勝負する日本企業の出展だった。オリジナルブランドで世界市場を狙う。

昨年も出展していた猫の自動エサやり機。顔認証で飼い猫を認識し、猫のコンディションによってエサの量を調整する。こうしたユニークな製品を探すのも Computex の楽しみのひとつだ。

レポートに掲載した製品に関して、Computex2018 & InnoVEX 2018の視察及び出展に関してはTCA東京事務所まで。InnoVEXのピッチエントリーも受け付けている。来年のComputex2018は2018年6月5日（火）から9日（金）まで会期5日間。InnoVEX 2018の会期は6月6日（水）から8日（金）までの3日間。InnoVEXとComputexは会期が異なるので要注意。

また、来年に向けてComputex事前勉強会を隔月で実施中。興味がある方はぜひTCA東京事務所までお問い合わせください。ippc@tcatokyo.com